

自由の学風を憶う（90・4・12 東京分館）

松延 慶二（昭12文甲）

ご紹介にあずかりました松延です。

京都の三高会館には、時々、お邪魔するんですが、東京のここには初めて参りまして、こういう立派なセンターがあることを知ったわけです。板倉君は私と同級でございます。昭和十二年の卒業になるわけですが、昭和九年の入学当初から。昭和九年と申しますと、昭和八年の夏、京大の滝川事件、あの翌年の春でございますが、私は一高に行く予定にしておりました所が京大事件で『自由』ということを新聞にも堂々と。学園の自由とか自由の鐘とかいうことを京大と三高一緒に唱えてたわけです。学問の自由とか学園の自由ということが新聞にも出る様な、そういう所が、まだ日本にあるのかと非常な驚きでございます。クラス担任教師その他が、やかましく反対したのですが、私は断固、第三高等学校に入ることに決めました。これは、やはり大きな決心で、私としては大事なことでございました。と云いますのは、私は台北で育ちました。小学

校一年の時、北九州小倉から台北に親父が転任しまして台北師範附属小学校以来リベラルな大変よい教育を受けたのでございます。台北一中時代には中国系の優秀な者が数名クラスにおりました。その頃は日本の国策的なというか、軍国主義的になってゆくわけですが、そういう雰囲気はクラスの中にございましてね。私は中国系の、むろん当時は日本の臣民ですが、台湾人であるクラスメートの方に同情的でございました。というのがそれ以前に、アルサス・ローレーヌのドイツとフランスの間にもまれた『最後のフランス語の時間』というか、あんな本を読んだことがあるものですから、小学校終りの頃。非常に純真な意味で民族の問題に幼い時から、そういった問題は今でも同じでございます。

だが、その頃、台北にいた方々でもいろいろで。私のライバルだった、後日東大経済学部教授の最近亡くなりましたＴ君がいますが、彼は太いに軍国主義的でございましたね。ですから、ああいいう植民地におりますと、そういう国策というか軍国主義的な方向で、何らそのほかに反省する所がない様なタイプの者が多いのですけれども、私はどっちかと云いますと、人道主義的立場より非常に異民族との間の問題は難しいと深刻に感じておりました。中国に対する、端的に云えば、二十一ヶ条の要求というそういったものに対する批判をする台湾人を、——日本国民になつてゐるわけで、彼等はエリート秀才ですが——クラスでなぐるとか。そういったことが、その先頭にたったのが後日、東大の経済学部長もやったＴ君ですよ。私が一番で、彼二番だったんです

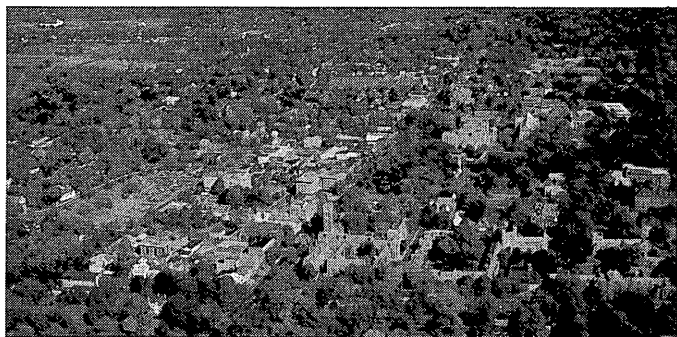
が。私はどうも、そういうことが出来ない。やはり少し考えが違っておりまして。ですから軍国主義という簡単な名前ですが、そういった呼び方でお許し頂くならば、非常にスーパ・ナショナルスティックになって来る時勢に、尚、自由ということを学園が主張出来るというのは京都にしかないんですね。それにゆき当たったものですから、昭和八年夏の事件を通じて。京都という所に、途中下車したことありませんけれども、断然、自由を標榜する三高に入ったのでございます。

これは少し違った、やっぱり特色がございます。私としては当然なんですけれども、それで板倉君、「いろは」の「い」、最初で組の世話役、しかも、北の秋田県から来られた、私は南の方からですが、板倉君、非常にクラスの世話をして頂くし、積極的にいろ／＼となさって下さるので、今日までの板倉さんのご貢献を衷心私は感謝しております。板倉氏最近は『一枚の肖像画』を通じて折田彦市三高校長の若き日、プリンストンでの研鑽の記事で有名ですが。

プリンストンとの関係をと申しますと、ニューヨークシーと、こう仮名をふって、折田先生が云われた。そのことが前述の板倉さんの最初の論説にございますが、あれは本当に英語は、あ、いう風に発音するんですよ。ニュージャージーと書いたら、それはいけないんで、ニューヨークシーと、大体RとLの混同症が日本人の癖ですから、ニューヨークシーという折田さんの仮名の振り方は、非常に発音が正確でございます。ニューヨークシーと、こう口ごもる様に云うんです。その点は折田先生の、いわゆるニューヨークシーという発音に学ぶべきですね。

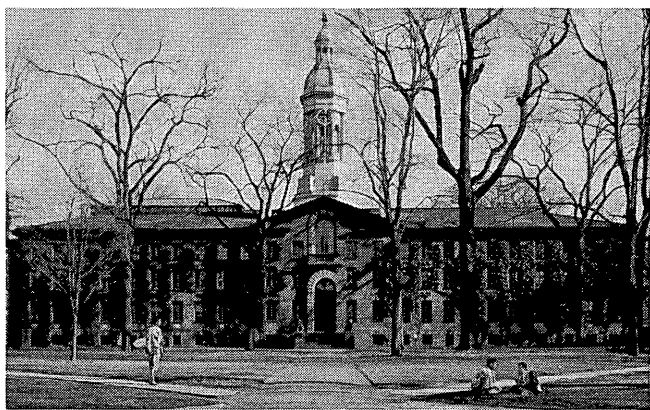
美しい学園でございまして、全体が森でございます。本当に世界一立派な美しいキャンパスである。そのことが人々を惹きつけるのですが。プリンストン高等研究所というあの湯川さん、ノーベル賞の。それから朝永さんもいられました。あれはプリンストンの森の一角にございまして、大学とは直接関係ないんでございますが、教育に関する色々な施設が、プリンストンの森に点在しております。しかし中心は大学の古い建物——新しい建物もございますが——非常に上品で、正にプリンスのプリンストンですね。我々、丁度大平洋戦争にかかる直前に大学生でございましたから、皆さんもそうでございましょうが、公爵の近衛文麿さんが御息をプリンストン大学にやっておられたわけですね。財政困難な公爵家です、大変金がかかるんでございますが、しかし大東亜戦争が始まる直前に近衛さんは、その息子をプリンストンから引きあげさせ、呼びもどしました。その時も近衛ご令息に対する盛大な送別会があったそうです。学生は各々クラブ員として夫々のクラブハウスに行つて食事をする事、なつております。学生はどこかのクラブ即ちフラターニティに、入つておりまして、そこで食事を必ず一緒にする。だから非常に選ばれた幾人かでございまして、少数の集りがそれぞれ一軒の家に食事に行くわけですから。まあ、そういう非常に貴族的なエリート tradition です。それに対しては、学内でも後日批判がおこつたわけでございます。

大学になりますのが、ウドロー・ウィルソン、第一次世界大戦の終結をヴェルサイユで致しま



プリンストン大学キャンパス

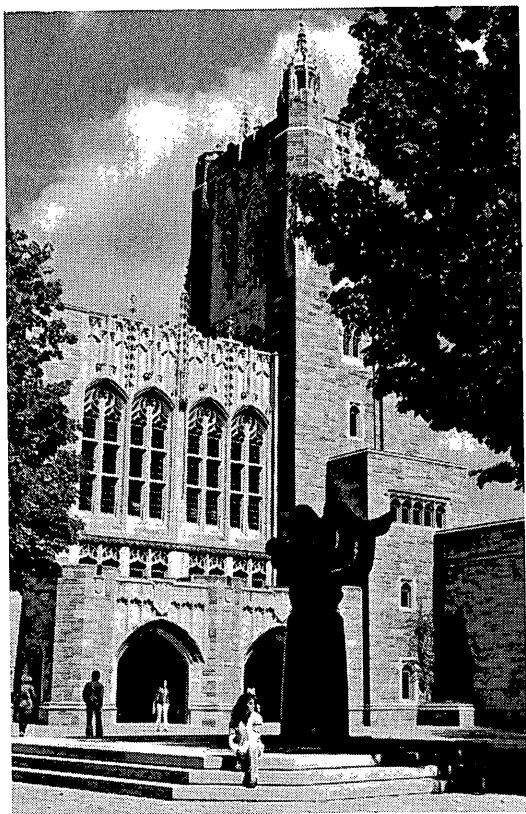
—空より—



歴史的な中心の建物（本部）

—ナッソーホール—

したウィルソンが——プリンストンの出身ですが——、学長にもなり、大学院も創るわけです。今日のプリンストン大学の特色である色々な優れた点は、彼の貢献によるわけです。ウィルソンは前述のクラブハウスの食事という点にも批判的でした。特に、ウィルソン以前でしょう。ニュ



大 学 図 書 館

—ファイアーストーン・ライブラリー—

ージョルシー・カレッジというか、そういう名前。プリンスストンの森の中のそのカレッジを大学に、全米で第一級の大学に盛り立てるのに骨を折ったのが、ウィルソンであります。そしてウィルソンは間もなく大学の総長にもなったというので、あの頃でございますね、第一次大戦よりずっと前でございます。

大学になるまではニュージョルシーカレッジ。明治の始め、西南戦役の前でございますから。

あの当りの研究が出来てる様で、まあ史学の先生方素晴らしい御研究をしておられると思いますが、どうも、やはり実は、明治維新といいながら、その詳細は、まだわかっていない。その時代そのものになって、本当に主体的にその意味を理解するということは、今度の板倉さんのこの記事で、目ざめさせられたのですが、今からやらなければならないという大事な課題であります。

むしろ外国の日本史研究家が優れた着眼で、かなり詳しくやっている。例えばプリンスストン大学におります日本史の教授は、マリウス・ジャンセン氏、オランダ系のアメリカ人で、坂本竜馬の研究家です。親しい友達ですが。ジャンセンさんとも今度、晝食によばれて久方振りに話を交わしました。職員クラブはプロスペクトというんですがね、以前には総長公舎だったところですよ。

あそこで『昨年、佐賀へ行って来た』というんです。『丁度、佐賀に市制百周年で招かれて、話をして来た。』と。『何日滞在されたか』と聞くと、『二・三日間でした。』ということで。佐賀の鍋島藩と云うのは、長崎に対する一つの国防上の防衛というか、大きい意味の、そういった意味

があるのだという風なこともジャンセンさん云っておられました。板倉さんの書いた、『一枚の肖像画』をお見せして差上げた次第です。早速コピーして、送り返すからと云はれて、受取られました。

武間さんが神学をやって牧師の資格をとられたプリンストンの神学大学院——プリンストンの神学大学というのは、プリンストン大学のご真中にあるのですけれども大学とは別でございまして、大学と別わくすることが教会の趣旨でございましょう。大学は宗派を問わない、今日はね。しかしプリンストンの神学校は、長老派、つまりジュネーヴでカルヴィンのもとに学んだジョン・ノックスがスコットランドに帰って宗教改革をした。それを長老派と申しますが、その長老派の教会の牧師養成の傳統ある学院がプリンストン神学校で、武間さんは多分そこで、ご勉強になってプリンストンの近くに、ご奉仕とありましたから、一番プリンストンのことは、詳しく知っておられるわけです。板倉さんの、折田インスティテュート、折田彦市研究所という、『これは、どこにあるのか』と、聞かれたのでございます。ジャンセンさんから。なる程インスティテュートと書いてある。これはプリンストンの高等研究所の様に将来なるんではないかと思いますが、板倉さんは非常にクリエイティブと云いますか、創造という名前を終戦後、満州から引き揚げられた時に改名とあったんで、これは、やはり素晴らしい創造性——クリエイティヴィティでございます。『ご自分の家でしょう、場所は』と。『大きな看板が、かかってんじゃないですか』、と云

つてお話をしたんですが、本当にどういふ風な一体。実は恐縮ですが、私が今、会長をしております、日本の学会、もう十二年目ですが、これは三高のスピリットを生かしたいという一念で、この学会を私は同志と発足させたいです。それがプリンストンと深い関係がある、この板倉さんの記事を読みますと、本当に三高というものが、プリンストンと関係があるという、つまり自由がですね。つまり規律とか、伝統とか、そういう習慣のうちに、本当に足が地に着いた自由というものは、いわば地味な教育であつて、しかもそれは高等教育に、カレッジに一番重点が、おかねなければならぬ、リベラルアーツの。それを日本でやはり折田先生が三十年間、校長としてなさつたということを、本当に重大なことだと私は教えられました。今まで度々、プリンストンに行つておりますが、プリンストンに僕が、度々行くのも、実は折田先生の植えられた、この精神によつて、いわば元^{モト}に歸つてゐる様な、そういう因縁を感じるわけでございます。

今、あそこの白線三本の応援団ですか、眼鏡かけた青年が一人おります。又、向うの方の座敷の奥にも同じ人物ですか、誰ですか、若い姿が見えます。私、あの顔を見、服装を見るとあのタイプを。プリンストンに行きますと、それ程、ハーヴァードの様な勉強々々という、そういうタイプじゃないんです。本当に生々とした人間性と豊かさ、全く同じですね。やはり新制大学、私、反対でございまして、旧制高校の教授でございましたから、新制大学には断然反対でございまして、たま／＼校長は一高出の、東京築地本願寺管長島地黙雷の御令息、生物学者島地威雄（岩波

文庫『ビーグル号航海記』の訳者）さんでした。その時、三高時代フランス語の恩師折竹錫先生は、旧制福岡高校の校長で、最後の。福高は、哲学は既に一人来ているんで、佐賀の方に私は拾われたわけです。その島地さんと二人、佐賀大学反対、旧制佐賀高等学校は九大の佐賀分校として、という線で、校長に代って、占領軍総司令部や文部省、安倍能成文部大臣や南原東大総長を訪問、二・三年間佐高同窓と共に戦ったのでございます。今では新制大学も早や四十年になりました。止むなく私も設立当時の新制佐賀大学の一員になりましたけれども、当時はまだ経済的にも難しかったということもございますが、スピリットがないんですね。何か教育機関を始めるという時には、遠大なヴィジョンをもってやるという、私立の学園では、それがあったのでしょう。国立で旧制高校廃止して、後に新制大学というのが、受身的で、最初の二年位を一般教育をやる、とか何とかいう名前で、旧制高校の良い所を生かすという意味だったのでございましょう。

しかし、どうもスピリットがない。アメリカのデモクラティックなカレッジの方が、まだ平凡でもスピリットがある。自由がある様です。どうしたもんだろうかというのが、私、悩みでございまして、極端に云えば、新制大学には興味が全然ないのです。教育者として、大いに興味があって学長になったり、いろいろやっておられる方々が多いと思います。皆さんじゃないけれども私は、どうしてそんなことが出来るだろうかと思ひます。私は、所謂戦後派ではありません。お金／＼とアメリカの属国みたいだね。スピリットがないんです、高等教育に。段々こいう話に

なりますと、学生相手の若い者に対する話の様に、熱が入りますんで、私は何十年も若い者ばかり、何百名という所で話をしておりますので、つい、そう云ったことになる。しかし朝鮮事變を通じて、その後、日本の財政も飛躍をとげる様になりましたが、当時は新制大学、例えば、駅弁を売ってる所には必ず大学在りと、駅弁大学と。佐賀大学は駅弁大学の一例。本当に興味が、なかったので、皆揃って九大の方に移ったわけです。私も九大の方に助教役になっておったわけですが。しかし、今日、見ますと佐賀大学その他、漸次充実しまして相当なものであると。そうすると新制大学に、どうして魂を今から入れるかと、今日の非常に大きな問題でございます。

私なんか年寄りには、それを憂えるし、それが必要だと思ふのですが、若い先生方は業績ばかり急いんですね、又、新制博士を取ろうとするだけで、教育には全然興味がありませんね。教員養成の大学、その他エリート的な学校も皆、そうなってるわけです、戦後。もう「戦後」という言葉は、おかしいのですが、四十年経ちました、一九五十年から。この当りで、どうして我々は三高にかつて生きていた。あゝ、いったスピリットをどうして、再び本当に日本に生かすことが出来るだろうか。私はそれでドイツの大学に勤めたり、アメリカにしょっちゅう。ヨーロッパ、アメリカでの国際会議に二年に一回、ひどい時には一年に二・三回行きますが、それは何でもありません。旧制高校が廃止されたからです。断固として新制大学はダメなんです。ジャンセンさんにもドイツでも、皆、私、そう云うんです。だから、この頃、海外でも私の友人達は、私がなぜ、

そう云うかということを、おわかり頂いてる様ですが、本当に日本の高等教育には精神が欠けているんですね。でも戦後に於て、皆さんそれ／＼会社の社長、学会のいろんな重任についておられまして、見事に日本は経済大国と共に、学園も教育その他も、ちゃんとしてるという風にお考えになつてゐる方も多いかと思いますが、私は不幸にして、そうではないんです。旧制高校一般とは云いません。特に三高の様なすばらしい学園を失つたということは、私は哲学会席上でもそう云つたんです。

目の前の九大哲学科の教授は旧制佐高出身者でしたが、国家的に大きな損失である、旧制高校が廃止されたことはと。そういう風な話をしますと、その後、非常に反感をもつたという方が多いとか云うことを聞きましたので、ここは大丈夫でございしますが。つまり哲学的な精神ですね。私、哲学へ行つて何の為に哲学へ行つたかわかりませんが。求道精神ですね。そして個性ですね。そういうものを大事にするということは、一体どこにあるのでしょうか。商売の会社あたりでは、それぞれ上役が新社員を鍛えて、しかも豊かな個性のある有能な会社の中核が出来てるんですよけども、私、存じませんが。本当に物質的というとおかしいですが、いろんな物が、物は一応足りてても、何か高等教育に於てこれでよしという、そういうあふれるものがない、余裕がないというか、そうすると日本はやはり経済大国じゃないですね。間違つてゐるわけで、本当に豊かであれば、当然、高等教育の青春に於て、やはり立派な教育が行われ、生きがいを感じるはずで

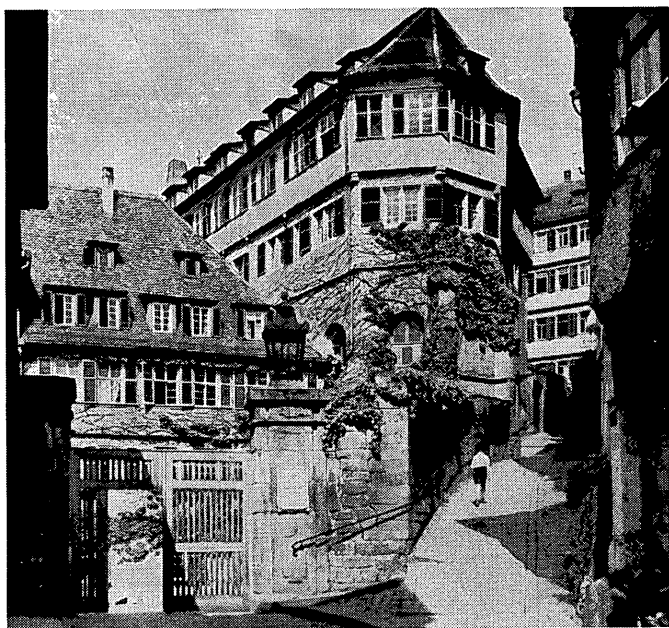
けども、どうもそれがない。それで私はアメリカやドイツの大学は昔ながらでございましたから、そこに長居をしたわけでございます。出張したまま。

今年の三月もナイヤガラ瀑布に近いバッファロー大学で会議がございまして、南部のナンバーワンの大学の学生が多数、教授と一緒に来ておりました。私のテーブルは偶然ヴァンダービルト大学の一群でした。いろんな話を交わしましたが、全く旧制高校の良い所がそのまま生き／＼してるのです。アメリカの大学には。所が日本の大学はね、それがない。教育ということに対して、受身的で自主性がないということではないだろうか。折田校長についての詳しい記事を板倉さんの執筆を通じて読ませて頂きました。私は懸命に読みました、熱中してね。随分、板倉君は歴史家になったものだなあ、細かなことに実証性を帯びておって、所々に板倉君自身のオピニオンが出て来る。それが又、非常に魅力的でしてね。

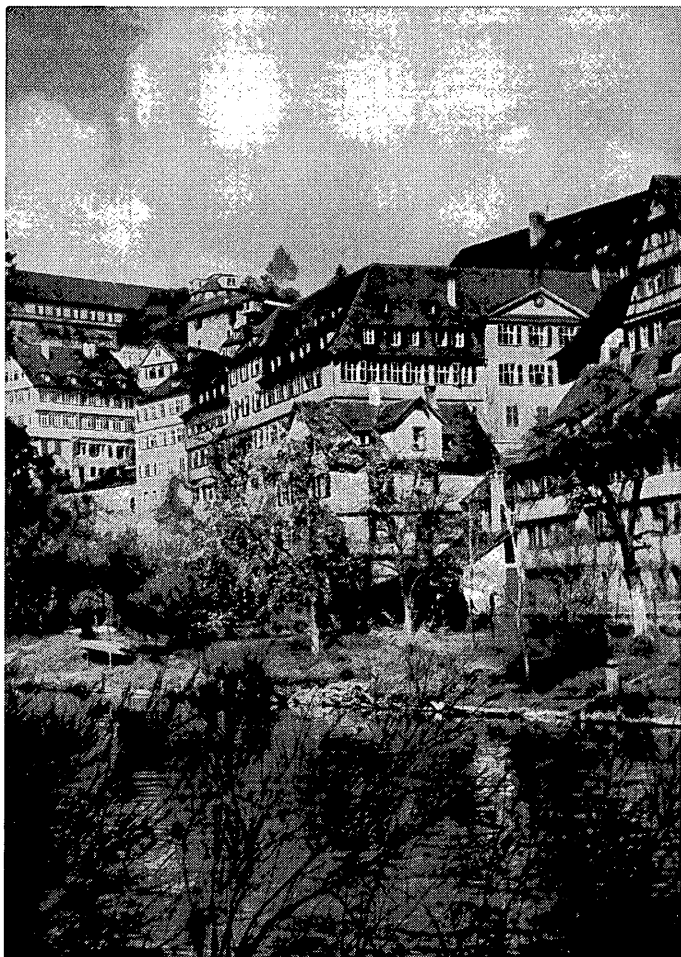
折田先生のお陰で植えつけられ、生きて来た自由の高等教育の精神が、今日何をしたら本当にクリエイティブな板倉さんの名前の様な創造的な歩みとしての価値ある教育になることが出来るだろうか。どうしたらよいのだろうか。誰も考えてくれない。ドイツでは私がおりましたテュービンゲンに、まだフランス軍の占領下でしたが、教育哲学者その他が集まりまして、ドイツの大学教授連が。東の方から逃げて来た方々もおられたわけですが。高等教育、大学について占領軍が、どうこうと、改革を迫ったのです、民主化を。その時にナイン「Nein」と、大学はこっちは

古いんだからこちらにまかせてくれという風につっぱねたらしい。このテュービンゲン宣言というのは有名でございまして、ですから私が赴いた時には、ドイツは昔ながらでございまして、悪く云えば。良く云って昔のいい所がそのまま生きておりました。それで私は旧制高校と同じ様な自由をそこに見出しまして、こちらの日本を願いによって辞めて、あちらに長くとゝまったわけでございます。果てしなく続ク森、ネッカー河畔の大学町に。

次にプロセスの学会ですが、ケンブリッジ出身の数学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドは、ロンドン大学定年後、六十三才でハーヴァードの哲学教授として招かれました。第一次大戦後間もなくでした。そこで新しい宇宙論というか、形而上学の試みをしたわけでございます。生涯ずっと英国市民でございましたけれども、アメリカの哲学に大きな貢献をしまして、最後までハーヴァード大学の近くに住んでおられたんですが、五年契約を三回くり返しましたが、四回繰り返しましたか、八十七才でハーヴァード大学の傍で亡くなられた。亡くなるまで彼の家に哲学専攻の学生や教師連が集まりましたが、その談話中、ホワイトヘッドが最高年令でありながら『最も若い』と、『一番若いではないか』という風に。それはホワイトヘッドとのダイアログ（対話）、丁度『ゲーテとの対話』というのが、エッカーマンのものがございますね。あれと同じ様にダイアログ。プライスという人の書物ですが。北大教授であった藤本君と旭川医大の岡田君が訳しております。本当にケンブリッジとか、英米の高等教育はうらやましい。世界の指導者



フランス革命の頃、ヘーゲル・シェリング・
ヘルダーリン、三人の親友が共に学生時代を
過ごした、ドイツの世界に誇るテュービンゲ
ン大学ネッカー河畔の寮と寮の入口



を出すにふさわしい、リベラルな伝統だなアと感激致します。

岩倉さんの二人のお子さんが一人は病氣帰国、他の一人は英国へ去られても折田さんはヨーロッパにも行かないで受験勉強迄ですすね、一年半か二年。そしてどうしてもプリンストンへ入ろうと、ニュージャージーカレッジに。実力をもって入試に合格した。それから四年間、更にマスターのデイグリーで五年間ですか。營々として、あのプリンストンで勉強なさった、あの森でそれはそれだけ人を惹きつける立派な處なんです、場所が。私、ヨーロッパも長うございますけども、あれだけ整ってしかも深い森で、そして伝統があつて。今度もプリンストンに行つたわけですが。というのがアメリカ建国二百年に、私は再度、ウッドロー・ウィルソン・スクールのフェローで参りました時ですが、丁度プリンストンに英国軍が最後まで頑張りましてね。独立戦争時。独立宣言した後にも、尚英国軍は引き下らなくて、プリンストンを拠点として、その大学のキャンパスのあの当りを中心に頑張っていたわけです。だから七月四日「July 4」の後、六ヶ月、丁度翌年一月の雪深い頃です。雪の中に昔のままの英国軍が漸く降伏して、英国に引き揚げるといふ、その儀式が二百年の記念としてありまして、私、それも雪の上に丁度、キャンパスの中央でありましたから見たんですが、英国の精神を、あすこは英国の拠点なんです、やっぱりプリンストンは。だから英国風なんです。ウッドロー・ウィルソン、大統領になりましたが、やっぱり英国的なんです、すべてが。私は英語を第一外国語とする三高甲類ですからおゆるし下さい。

私達の時代、昭和の九年に入ったわけですから。九年十年。二・二六事件が間もなく始まる。

ある朝、二・二六事件のビラを見ました。二年か三年の時でしたか。あの頃まではまだ何とか自由を持ちこたえた。それから先はガーンと変ったんです。やはり折田彦市先生が、三十年間、大阪からずうと第三高等学校の校長として最後まで、六十の定年でお辞めになったけれども、三高に自由の精神を植えつけられたということは、どういう意味があるだろうか。どういう系統だろうか、それはまさしく英米のすばらしい、やはり誇りとする所のもので、永遠のものであるとそれは経済で自由主義とか、社会政策とか社会思想史で習いますけれども、そういうことじゃなくて、本当の自由ということ、生きがいという様なことを、特にそれを教育に於て日本に持つて来たということはすばらしい。

鹿児島は沢山の教育者を出していますけれども、折田さんはナンバーワンじゃないか、それはやはり信仰ですね。キリスト教の長老派の教会に、日記をみますと度々、礼拝にも出席、祈禱会にも出るし、聖書を勉強しておられる。仲々一辺にはいかない。森有礼とか、その他どん／＼過激にやろうという実践家もありまして、それはそれで悪くないんですけれども。折田さんは非常によく考え、慎重であった。日本の良い所を身につけておられたからでしょう。しかし最後に、やはりプリンス頓を卒業する近くになりましたからですが、イエスを自分の師（主）として、イエスを受け入れようと、何もクリスチャンになるとか何とか、そんなことじゃなくて、イエス

を受け入れるということは、非常に内的な内面性ですね。本当に受け入れようと、これから。それは秘訣でございます。私なんか、この年でなか／＼それが出来ていないんですけどね、やはり内的な一番大事な自由と規律ということをね。テュービンゲン大学では“Magie der Seele”『ダギー・デア・ゼーレ』、『魂の魔術』なんて云って、例えばE・シュプランガー教授なんか教育哲学で岩波から翻訳も出版されていますが。ドイツは中世紀に神秘主義というものがございまして、その神秘主義の深い内面性のもとに近代科学の基礎理論、色々な緻密なこと、発見もすべて、そういうものがあるから、ドイツには学問も発展したと、同時にミステイクとラチオナルなものとの関係は、今だに古い大学を持つドイツに於て課題でございます。だから内的な、神秘的なものに通じる様な内的なものと、現実の社会、経済すべての秩序発展との関係の問題は、これは英米が優れているんですよ。ドイツは神秘的な、ここにドイツ語を第一外国語とされた文乙の方、多いと思いますが、私、ドイツに永く居りましたから、ドイツの学生を本当に親しく教えておりましたんで、今の若いドイツの学生は、素晴らしいんですけれども、老教授あたりをみますと、皆、立派な方で親切でございましたけれども、やはり内的なことに於ては、非常な自信があるんだけれども、社会の秩序機構そういうものとの関係に於ては、やはり英米のそこまでいかないんですね。それは長所であり欠点であるわけです。

ハイデルベルグ大学が、もう六百年ですか。アメリカ建国二百年。ハイデルベルグ大学の六百

年祭その直前テュービンゲン大学は五〇〇年祭で、その記念の新聞を送って参りましたが。ハイデルベルグよりずっと上流の奥地なんでございます。ネッカー河畔のテュービンゲンは。哲学者のヘーゲルやシェリング、又、詩人となったヘルダーリンが仲よく学生々活を送った所で、それで私も行ったわけですが。世界中からの多くの学者、研究学徒を前にして、ハイデルベルク大学の代表である総長が六百年祭にこう云った。これは日本の新聞にも出ておりましたが、『神秘的な中世紀からの深い内的な精神と合理性との間の調和が、その間の問題が、実際まだドイツ、西ドイツの課題であつて、まだ出来ていない』と、そういうことを正直にはつきり云ったんです。

外国からのドイツに来てる学者に対して。六百年祭に。私、それは当たっていると思います。それでやはりその両方を、私達は明治に於ては持つておった、維新以来。ところが大正リベラリズムといわれる、その頃まではいいんですが、その後、そのことが国家的な高等教育の課題として取り上げられることが、正面からないのではないか。社会的な経済性、その他医学にしましても、あらゆる面に於て日本の合理性は、ある意味で進んでるわけですが、内的な問題との関係における、それがプロセスなんです、それはやはりまだこれから開拓されなければならんのじゃないかと。折田先生の地味な何十年間の生涯をかけてのご貢献は、正にその問題を立派な手本として大阪から京都の場所に於て、時代は違いましたけれども、プリンストンで学んだことを本当に身を以て日本に生かされた、まあミシヨナリー以上のミシヨナリーですね。つまり日本の文化伝

統というものを、よく身につけておられる。だから簡単にヨーロッパ・アメリカ化するということについては、なさらないだけけれども、日本に帰って第三高等学校というものを通じて、折田先生がちゃんと地味になさったということは、これがやはり本当の日本の主体的な合理性と日本の以前の深い霊的なものとかかわり合いのあり方であって、そういう高等教育が、これならだれが一体やるんだろうか。私は学会を創って丁度、本年第十二回の年次大会を東北大学で致しますが、その時にも、私は会長ですけれども、『一枚の肖像画』という題目で、研究発表を申し込んであります。

東北は板倉さんの郷里ですから、板倉さんにも来て頂いて応援して頂きたいと。二十分か三十分間の短い発表でございますが。やはりどうして再び三高の他にとって代わることの出来ない、かけがえのない大事なものを、どうしてこれを後世に伝えることが出来るだろうか、この課題に私は答える一つとして、このプロセス学会の創設にあづかりました。ワーズワースの研究で名高い村上至孝（ホワイットヘッド著『科学と近代世界』の邦訳者）さん、三高の英語教授でしたけれども、大阪大学の英文学教授になられましたね。村上さん、まだご存命の時に、私はこの学会はノーベル賞候補者養成の三高を再建するという意味でやってるんですよ。ということ、ちょっと手紙で書いたことがありますが、早速ご返事頂きまして、本当なんです。それは正にプリンストンで学ばれた折田さんの精神だったということを板倉君から教えられまして、本当に素晴らし

いことだなアと。他に高等学校は沢山ありますけれども、ただ旧制高校という制度を残せとか、何とか云うのじゃなくて、そこには魂があった、新制大学で本当に魂のある大学は幾つあるでしょう。ないですね。例えば昨年の秋に武蔵大学で第十一年の年次研究大会を致しまして、私はもう辞めたいものですから、会長を、『北条時敬先生と西田幾多郎』という題目で、二十分程フリーハンドで話をしたんですが、北条時敬という人は、元冠のときの北条時宗の子孫です。関ヶ原の合戦で、さっさと引き揚げた加賀百万石の大名、前田利家の家来になった北条家の子孫です。もとは鎌倉の北条ですね。その先生は東大の数学科を最初に出た方ですが、非常に秀でた教育者で、学者にならなくて教育者になったわけですが、第四高等学校の前身の専門学校の教授として赴任されたんです。間もなく、そこに弟子入りしたのが西田幾多郎青年。やがて第四高等学校で何かになりました、何と云っても北条時敬先生は、断然、光っておられた。先生の家に来いと云われて、西田幾多郎は、北条先生御夫妻と一緒に生活。やがて薩摩から来た県会議長が何かの荒っぽいのが、校長に赴任、百万石の緻密な伝統の子弟関係、人間関係というものに無頓着な、そういう校長に非常に失望して、西田さんも騒動起したか何か、数名と退学しましたし、北条先生も早く辞めて東京に行かれ、やがて第一高等学校の教師になるわけです。それ程、薩摩の人は九州の薩摩は、無骨でよくないという話をしたんですが、今度は仙台ではそうじゃない。薩摩人にも折田彦市の様な立派な緻密な方がおられるんだという話をしなきゃ、不公平になりますんで、

そういう話を是非、板倉さんに来て頂いて。

東北大学は法文学部として、学際研究でその前は理科系で優れていたんですが、法文学部が出来ましてからは、三高の同窓も随分、あそこの教授になられた方が多いんですが、私が三高を卒業する頃は東北大学法文学部は、断然日本一でした、学際研究に於て獨創性を發揮して。だから三高卒業後、哲学専攻でこの哲学科に行こうかということ、土井虎賀壽という論理学の教師に尋ねた所が通称『土井虎』はですね、おれが若かったら東北に行くと云ったんです。あのズーゾー弁の東北に。まだ新幹線もないのに、郷里は九州ですからね。そんなこと……。だけど實際そうだったんですね。東京大学は京都から和辻哲郎が、私の恩師の京大田辺元と喧嘩して、母校の東京大学に行きましてね。和辻さん一人がですよ。東京大学の哲学科に和辻さんがおるということだけで、もう東京大学は、まずよろしいということになる位の大きな存在だったんです。だから東大の和辻さんの所へ行くか、京大の田辺元の所へ行くかという問題になったんですね。土井虎は、その時に和辻さんは甘いも酸っぱいもよくわかった人だと、自分はこの原稿をもって、明日、和辻さんの所へ行くんだと、それから、田辺さんは自分の体系というものを持った人である。唐津の出身なんです。東京の江戸邸の家来の御息です——。田辺さんは自分の体系というもの、ちゃんと持っていて、概念的なんです。その通りです。弁証法のね。京都の学派ですが。西田先生にくっついてなかったんです。『だから貴方は弁証法がわからん』と、こう云って、つか

かつて。『君からそう云われるのは心外だ』と西田さんは答えられたそうですが、そばにいる者は、ハラ／＼したといいますが。それから間もなく西田先生の弁証法的な「歴史的世界」が出て来るわけですが、しかし西田先生は偉らかったですね。やはり最後は弁証法的なものを越えた。丁度、A・N・ホワイトヘッドの立場と殆んど同じですね。コントラスト——弁証法ではないコントラスト。西田先生は然し、無の立場ですが。こういうわけで、やはり田辺先生よりは遙かに突き出ておられたと。それは三高の大先輩である下村寅太郎氏によるライブニッツに関する研究に負う所が多いんです。それで最晩年は逆対応の論理、弁証法じゃない逆対応のコントラストの立場です。これがホワイトヘッドと裏表なんです。ホワイトヘッドは、こゝに数学御専攻の方おられると思いますが、ラッセルと共著で、第一次世界大戦が始まる直前に、プリンキピア・マテマティカ（数学原理）という劃期的な書物を出し始めました。それは大きく従来の論理というものを変えることになったので、それ以後、哲学は昔ながらの哲学ではないわけです。しかしそういう新しい立場に於て、ラッセルとは袂を分けて、ホワイトヘッドは独自の宇宙論的な形而上学を試みたのが、ハーヴァードに来てからです。

それから、もう一つは分析哲学とか、日常の言語を分析する様なことに熱中するオックスフォードを中心として。又、ウィーンから来た論理主義という様なものも、私、シカゴ大学に行っておりました時に、ウィーンからの此の派の有名なカルナップ教授がおりましたが。やはり日本は

非常に思想的といえますか、論理的には後進です。技術に於ては優秀ですが、哲学や論理に於ては、やはりまだ後進性というか、まだ行くところまで行っていないというか、皆様はおわかりでしょうが、一つの社会のいろ／＼な仕事をしておられる方々が、同時にアカデミックな問題とのつなぎを持たねばならないのですが、それが社会も入れた、論理に出来てないんじゃないかという感じを致すわけでございます。それで私は、色々の学会の存在理由（レゾン・デートル）を非常に反省するわけでございます。プリンストンという所は、前述の様に美しい森で、そこにウッドロー・ウィルソンによって大学に昇格した見事な学園があるわけでございますが、一九五〇年に、米国に参りました時（三高時代私は日米学生会議代表として一度渡米した経験がありますので）には、まずプリンストンに行き、それからエール、ハーヴァードと廻って最後は、シカゴ大学でプロセス哲学を学ぶことになって、二年おりましたけれども、とび出してドイツに行って戦後の悲惨なヨーロッパの惨状にふれたわけでございます。しかし西ドイツにおきましては、やはり今日EECの中心力となった様に、勤勉で本当にしっかりと歩みを、手に手をとって前進して来た、日本も懸命に働いて来たわけですが、西ドイツはやはり立派な模範として、結局、ヨーロッパの中心になり、現になっておるわけですね、やはりそれは、キリスト教的な神学の依りどころが、しっかりとおるといふ感を私は受けたわけでございます。

昔ながらの大学制度で、ドイツの優秀な学生を毎学期持つておったものですから、私はもともと

と英語・フランス語でドイツ語は独学なんですけれども、しかしこれも一流の諸先生に三高時代から、林久男（林久^{リキユウ}）先生とか、内山貞三郎教授とか、日独文化協会とか、ゲーテ・インスティテュートが出来てからは、大山定一さんにもお習いしますから、まあ立派な先生に習ってるんですけれども、大体わざわざフランス語をやったわけです。然しドイツに長くおりましたから、ドイツ語で講義しなければならない。日本の学者が英語でやっては恥である、英語で話そうかと云われても、私は『いや、ドイツのこの土の上では英語は話したくない』と、こう意地ばりましてね。えらい意気盛んなことですが、損をしたんですけれども。やはり私の課題は新世界のアメリカと古いヨーロッパとを繋ぐ、そして自分は極東ですから、結局グローバルな三つを統一するというか、それに橋かけるといのが、私の課題でございまして、日本における地位を捨てて、一介の講師をして向うに勤めたわけですから。お陰で年金は少ないわけですが、非常にご奉仕したつもりでございます。それで今でもこんなことが云えるんですが、折田先生はヨーロッパへ行かなかった。駐イタリヤ大使館の、公使館ですが、その書記ということも親しい森有礼さんから薦められながら、ことわったと、というのは非常に足が地についたと云うか、地味な教育、教育者ということを信念として、第三高等学校に、それを献げて下さったと。私は地球あちこち参りまして、ヨーロッパも長かったんですが、大学もよく観察させて頂きましたけれども、矢張りプリンストンが教育の場としては世界一でしょう。美しくて小じんまりして、只、医学部はあ

りませんがね。まとまっておる。だから第三高等学校の同窓生がまだ、こうして生きながらえておりますからプリンストンと協力して、何か折田先生の精神を高等教育にさ、げる。あの自由な精神を。

世界の開發途上国は今、高等教育機関を作ろうと日々一生懸命もがいてるわけです。その時にとかく高額の技術だとか、商売経営の方に熱が入り、人間を忘れるというか、人間と社会の根源的な問題を、余り問題視しないという、そういう技術的な高等教育になりがちです。それに対して折田先生の精神で、やはり高等教育をしつかりしなければ、それこそ恒久平和は望めないわけですし、繁栄もないわけです。そういった開發途上国に於ける高等教育のあり方、又、日本の新制大学がいろいろな点で、ある意味で行きづまっておる、それに対して魂を打ち込むこと、そういった様なことについて研究をする方々への研究費の様な、奨学金の様なものを一つ創って世界的にプリンストンと共同して。そしてプリンストンの学生、又、日本の学生でも、あるいは後進国の学生でもいいですが、こぞって折田先生の大きなご貢献を偲ぶことが出来、更に前進させることが出来る様な、そういうことをしてみたらどうだろうか。プリンストンには武間君もおられる様ですし、その他、私は何度か参りまして、一度行った時には何とか云う日本の美術史の立派な第一級の方が、三高のご先輩ですが、丁度訪問教授として講義しておられました。ですから三高とプリンストンの関係は、私はほんのわずかでございまして、沢山、他におられるわけです。

ですから、高等研究所も入れますれば、むろんいろいろありますが、プリンストン高等研究所のモートン・ホワイト（アメリカ思想史担当）もこの前、日本に来ておられました。ヨーロッパの思想を受け入れる時の受け入れ方がですね。大西洋を通じては、自然に入っていると思います。そして新しい世界米国が又、旧い世界、ヨーロッパに対して色々貢献していると思います。

ところが大洋は不幸が続きました。移民排斥とか日本人の。そうしてまだこれから問題が出され、開拓されなければならぬ。だから、これからは大洋の時代になるわけですから、何かこれからプリンストンと協力しまして、三高のすばらしい伝統をですね、ただ、高等学校のじゃありませんよ。三高にのみ与えられた自由の高等教育の折田先生の精神を生かす様な、研究費としての基金を集めるとか、そして残してみたらどうかという様なことも、板倉君とちよつとお話をしたわけでございます。私は財閥じゃありませんけども、まだ、同窓でお元氣な方々、多数おいでですし、我々の存命の間に折田先生のこの自由の教育を後世に残したいものです。

此のことに関連して、京都三高会館での折田彦市記念講演の折、三高同窓会長である奥田元京大総長より『関西国際高等研究所』設立の趣旨を承わり、その基金として既に予定を上回る高額の基金が三高同窓より寄せられたことを知り、感激を新たにしました。

プリンストン案内——続き

人格主義といつてよいか何うか、むしろ人間らしき——パーソンということは、永久に我々学ばなければならぬのじゃないか、それが三高のすばらしい謙虚な精神であるし、又、誇りである。全くプリンストンの学生のすばらしい自発性。ボートのためにカーネギー湖という人工の湖まで学園内に創った。エイトが往復出来る様な、これも同窓の力です。本当にあそこには同窓が力を入れている、大統領も出ているわけですから。是非一つ、プリンストンを訪ねて下さい。ニューヨーク地域周辺には、今日、三つ国際飛行場がございますが、ニューヨーク州に近いニューワーク飛行場に着くのが便利でございます。ニューヨークのペンセントラル——ペンシルベニアとニューヨークセントラルと一緒にたつてペンセントラル——という鉄道ですが、ニューワークのステーションから乗りまして、今度もそうしましたが、そこまで送ってもらつて、そこから乗れば約一時間です。プリンストン・ジャンクションという駅がございます。岐れ道があります。そこからプリンストンのキャンパスの中への支線が——十分間位ですが——ありまして、本当にプリンストンの大学の為に駅が終点としてあるんですね。ペンセントラル（今日はAMトラックですが）に乗りまして、ニューヨークだったら、ペンシルベニアステーションですが、それから約一時間半で、プリンストンジャンクションという分岐点に、そこで乗り換えてプリンストンの学園終点に。森の中で、すばらしい。本当に週末など行つて静かに散歩する理想的な憩いの

冥想的な場所でございます、環境が。私が最初に行きました時は、丁度アインシュタインが来ておりました一九五〇年でした。

英国の伝統の善さが、アメリカ新世界に於てプリンストンという所に結晶しているわけです。アメリカの私立大学が、最近皆、財政難でございます。州立大学の方がぐんぐんのびておりますが、資金をいろ／＼工夫して集めておられるし、同窓もすばらしいんでございます。プリンストンの有力な卒業生として例えば、日本の国際連合大学最初の総長になられた、ジェイムズ・ヘスターさんもプリンストン出の逸材です。私の郷里、福岡県の占領軍CIE責任者でした。二十・三才のプリンストン大学出たてですが、彼が教育関係の責任者でした。それは父親がバプテスト派の牧師だったからでしょう。福岡には南部バプテスト派の西南学院がありますし。彼とは親しくて、やがて彼は国連大学の最初の総長になって五年、今、ニューヨークのマンハッタンの北、ブロンクスにあるニューヨーク植物園長、ジェイムズ・ヘスター・ジュニアなんですが、私、感激したのはプリンストン出とは、こういうものかということが判ったのは。ヘスターさんが福岡という大きな県のCIEというか、教育の責任者。たった二十二・三才、プリンストン大学を出たばかりですね。それが宴会の時に食事をしないんです。占領下日本は食糧難ですからね。田舎の学校に講演に来てもらったんですが、食事に手をつけない、たゞお酒をちよつと飲んで、それから隠し芸を夫々ということになったら、ヘスターさん、きつさと立ち上って、炭坑節を日本

語で日本人よりもずっと上手に歌いました。一同びっくりしました。えらい外交官だなアと思つて、日本人よりも上手でしたよ、日本語で。プリンストン出たばかりのヘスター君がね。これは大した外交官だなアと思つてびっくりしました。その後、加州ロングビーチ在住の彼の親父の家へ行つて、あなたのお子さんは偉いものですね、炭坑節を日本語で日本人以上に、しっかり歌いましたよ。と申し上げたんですが。ヘスターさんは果たせるかな、やはり国連大学最初の総長になつて来たわけです。

これはプリンストンのすばらしい教育の賜です。今、駐米大使の村田君も三高出身らしいですが、ノーベル賞の湯川さんから朝永さん、皆、プリンストンの高等研究所に行つておられますから、こつちからも行つてゐるわけですが、今後もプリンストンをお訪ね頂いて、前述の日本史のジャンセン教授が、もう定年近いんですがおられますし、又、東アジア研究の図書館がございますジョーンズホール、そこをお訪ねになつて、板倉さんの書かれたものも、向うにあるわけですが、交流を是非。

何でも便宜をはかると思ひます。多数のスタッフがおります、日系が多いんですが。やはりプリンストンは素晴らしい、ニューヨークは本当にひどい所ですが。ちよつと一時間程、ニューヨークの方に行きますと、プリンストンで全くの別天地で憩いの場所でございます。どうぞ一つ。

只、あ、いう英国の伝統が、やはり新しくなること、リニューアルというものを要する。新しくならなければならない。今度、プリンストンへ行きまして、新緑でも紅葉でもない冬でした。紅葉の頃は本当に何処へ行ったら、これ程、美しい紅葉狩りが出来るだろうか、という様なすばらしい大木の紅葉に囲まれているわけですが、今度は冬で木の葉がありませんので殺風景でございましたけれども、どうか良い季節に一度、プリンストンをお訪ね頂きます様に。私が板倉さんの書かれたものを読む前に、度々、プリンストンにばかり寄ったということは、やはり深い因縁があつたんだということをつくづく感じております。私がプリンストンに何度目かに行きました建国二百年の頃だったでしょうか。あそのウドロー・ウィルソン・スクールという国際関係、行政の新しい大学がございますが（建築は日本人の設計）その玄関のロビーに、大きな国連の地球儀を前に私ソファ―に腰かけていたのです。そしたらある日本人（東京の玉川大学出版部編集長）が来まして、望遠鏡の様にカメラを首からさげて、ウロウロしておる。案内の学生が今から講義があるから困ってたんです。それじゃ僕がやろうと、僕が案内しましょうと、これ板倉さんの様に積極的に創造的に。これプリンスト―ニアンの精神ですよ。この積極性が。やってみたのです。つらかったのですが、そしてその人を案内してですね。しかも荷物が、なか／＼来ないんですよ。バスで――失なわれたでしょう。その荷物を発見することまでも、彼がボストンへ行つてゐる間に。その為にエスカレーターに荷物乗せて、ここの手首の骨が、どうかなった様

な大きな犠牲を伴いましたね。クリエイティヴィティー（創造性）ということは、同時に犠牲を要求しますね。それでプリンストニアンになったつもりで、おれはプリンストニアンだと思つてやった所が、やっぱり大変な苦勞があつたわけです。

しかし自信を載きました。その結晶が『地球時代の先駆者——外政家ウィルソン』邦訳出版です。鹿児島県出身の小原芳氏の創られた玉川大学出版部編集長の関野君との出逢いからです。そのご縁で書物を玉川から出すことになったんです。やはり一歩踏み出すということ、それは仲々出来にくいけれども、やはり一歩ふみ出して、積極的に。プレスビテリアン、カルヴァンの伝統の長老派は。この世の俗な世間、経済政治、それを俗なものとして、いわば内的なというだけにとどまって世間との間は妥協しないんだという風にするのが、ドイツを中心とするルター派教会の弱点でしょうか？ルターは素晴らしいですけどね。ところがカルヴァン派は、ルーテルから、ストラスブルクあたりで、大いに影響受けているんですから別のものじゃないけれども、カルヴァン派はこの俗な、経済、政治の俗の真只中に、神の国を建設するという、そういう積極性ですね。それで使命観ですよ。決められて、選ばれているという、自分こそが選ばれておるから、自分が犠牲になってやるんだと。正に板倉さんの三高で初めてお目にかかつて以来の精神ですよ。こういうものがやはりなければ、我々目をつぶるわけにいかないんじゃないか、皆様、お子様、お孫様方に教育しておられると思いますけれども、積極的に一歩踏み出すこと、こういうことが

今、日本に望まれている。ところが新制大学の高等教育は、ちつともその教育をしておられない。それへの自信がある教師がない。そういう自由と創造のね。折田先生の残された。学生が何名か押しかけて、校長室にね、大いに議論したけれども、折田さん黙っておられて、議論は君達の方が勝って、強い様だと、私は議論はしないと、しかしこうしなさい。秩序を守れ。あれがやっぱりすばらしいと思います。

教育者は、そういう風に議論するのは、教場でいろいろ質問はいいんですが、やはり教育者は、校長なんかは、学生と一緒にレベルで議論したら、お前達三名で、こっちは一。君達は議論の方が上手だ。だけでもこれはこうしなさい。これはまげられんと、法はね。こういう様な所は、やっぱり薩摩の藩士としての島津さんの小姓だったわけですから、秀才中の秀才で、しかもすばらしく忍耐強い。プリンストンに七年間もおられて、受験準備時代から。ちゃんとマスターのディグリーまで取るということは、明治維新初まったばかりの時に。そして最後に「ジャパン、パースト・アンド・プレゼント」という講演をなさった。『日本の過去と現在』と。だがが今日、日本に於て『ジャパン・パースト・アンド・プレゼント』という講演をなし得るでしょうか。やはり相当の自信と強い信念に、それは信仰に裏づけられていなければ出来ないことですね。それを堂々と、彼は優等生だったでしょうけど。あの維新の頃、ちよんまげがまだ漸く、あの廃藩置県の始まるか始まらんかの頃ですね。さすが岩倉さんがちゃんと目をつけてね、一切まかすと、

岩倉具硯という公卿の家では光った存在、折田彦市という人物を育てたわけで岩倉家が、バックとして、正にプリンストンが当然です。盡さない色々な問題を板倉さんのエッセイからは。私は非常に学ぶ所も多くて、本当に感激でございます。

（九州共立大学教授・日本プロセス学会名誉会長）